

『東国旅行談』巻之五に見える恐山の「火」の記録

秋田大学教育文化学部 林 信太郎*

On the “Fire” of Osorezan recorded in “*Togokuryokoudan*”

Shintaro Hayashi

College of Education and Human Culture, Akita University

1-1 Tegata-Gakuen-Cho,

Akita, 010-8502 Japan

Osorezan is an active volcano in northeast Japan, which is designated as an active volcano by its fumarolic activity. It has no historic eruption record.

“*Togokuryokoudan*” which was published in 1789, includes composition as “The fire burns up, producing rising smoke”. The author examined “*Togokuryokoudan*” in detail. There is three possibility : 1) “The fire” means bush fire, 2) “The fire” means small scale phreatic eruption, 3) “The fire” means intermittent fumarole. It is highly likely that this composition means intermittent emission of steam from fumarole.

Keywords: “*Togokuryokoudan*”, Historical eruption, fumarole.

§1. はじめに

恐山は東北地方北部下北半島にある火山である。この火山は、活発な噴気活動が存在することを根拠に活火山に指定されているが、噴火記録は知られていない。江戸時代に発刊された『東国旅行談』（撰者 寿鶴齋）巻之五には、「南部の焼山」と題して下北半島の恐山の記述がある。ここには恐山山頂で「一陽の火おこり、猛火焰々として燃えあがり、」と、噴火を疑わせる記述がある。これは産業技術総合研究所のデータベースである「日本の第四紀火山」、活火山データベース、日本火山学会の「第四紀火山カタログ」、気象庁の「活火山総覧」のいずれにも、噴火を示す記事としては採用されていないが、村山（1978）には、噴火を示す記事として採用されている。本論文では、この記述が、噴火を表したものであるかどうかを検討する。

§2. 『東国旅行談』について

『東国旅行談』は江戸時代に発刊された旅行記で、五巻からなり、天明九年（1789 年）正月に刊行された。著者は寿鶴齋と思われるが、『東国旅行談』中では「撰者」とされている。寿鶴齋は友人と連れ立って、日光、松島、象潟等を訪れ、そこで見聞きした諸国の話や奇談を書き留めた。これを版元の依頼でまとめたものが『東国旅行談』である。出版は天明九年である。序文の年月は天明七年の春なので脱稿はこのときと考えられている（『日本名所風俗図会 1 奥州・北陸の巻』解題より）。内容の中心は奇談や伝説が中心で、

例えば巻一の「巫女石」では女人禁制の男体山に登った巫女と牛が石になった話が、巻三の「月山の刀」では「月山」と銘された刀が石をまっぴらつてきたこと、同じく巻三の「象潟」では隆起前の古象潟湖の島々で人々が酒宴に興じる様子が書かれている。

§3. 『東国旅行談』に見える恐山の「火」の記録

『東国旅行談』巻之五には、下北半島、十和田湖、三戸、岩木山、平泉などの記述が書かれさらに旅泊諸国寄合話として、旅人から聞いた諸国の話が書かれている。恐山の記述は、『東国旅行談』巻之五冒頭の「南部の焼山」と題された条の前半部分に書かれている。該当部分を朝倉治彦（1987 編）『日本名所風俗図会 1 奥州・北陸の巻』から引用する。「奥州南部領八の戸より程ちかき所に、大畑村より登る山なり。峠までの道法三里半といふ。この山の絶頂は、時として一陽の火おこり、猛火焰々として燃えあがり、煙雲を払ふありさまなるが、また時いたれば消えて常のごとし。因って焼山といふ」この後の部分には、恐山の霊場にある地獄の話が書かれている。なお、村山（1978）では、「陸奥焼山噴火」と冒頭に引用されている。この 6 文字は国立国会図書館に保存されている『東国旅行談』にはない。

「奥州南部領八の戸より程ちかき所」とあるので、この記述が恐山であることはまちがいない。ただし、大畑村は八戸から約 120km あり、「程ちかき所」というほど近くはない。現在の大畑村と恐山霊場のある宇曾

* 〒010-8502 秋田県手形学園町 1-1

電子メール: hayashi アットマーク ipc.akita-u.ac.jp

利山湖までは直線距離で 11km ある。江戸時代の古道については調査していないが、「峠までの道法三里半」というのは妥当な距離であろう。「時として一陽の火おこり、猛火焰々として燃えあがるのは、「山の絶頂」とあるが、恐山の最近 20 万年の火山活動はカルデラ内に限られ、その中には「絶頂」と表現されるような鋭い高まりはない。「時として一陽の火おこり」、「また時いたれば消えて常のごとし」とあることから間欠的あるいは突発的な活動があったことがわかる。「煙雲を払ふ」とあることから雲を払うように見える高い噴煙あるいは噴気があったことがわかる。「一陽の火おこり、猛火焰々」とあるが、この意味については後ほど議論する。なお、この記録がいつのものなのか日時は書かれていない。序文の年月は天明七年の春なのでそれ以前、おそらくは天明年間の記録と推測される。

また、『東国旅行談』にはしばしば他人から聞いた話が書かれている。著者の寿鶴齋は実際に恐山に行ったのだろうか？ 恐山の霊場についての記述が詳しいこと、円空が石の地藏菩薩を作り足した話を「案内者の物がたりをそのまま、ここに書きしるすものなり」とあることは、実際に誰かに案内されて恐山を訪れたと思わせる部分である。しかしながら、「時として一陽の火おこり、猛火焰々として燃えあがるのは、「山の絶頂」と書かれているが、これは恐山中心部の地形とは異なり、実際に恐山を訪れたかどうか疑わしい部分もある。現状では、寿鶴齋が実際に恐山を訪れたかどうかは判断し難い。

寿鶴齋が実際に恐山を訪れていた場合、恐山の「火」の記録に続いて、恐山霊場の詳細な記述が続くことから、噴火が起きていたとしても小規模だったことが推定できる。なぜなら、中規模以上の噴火が起きていた場合、のんきに火口近くで地獄巡りをするはずはないし、激しい音に関する記述があつてしかるべきである。噴火があつたとしても小規模なものでしかあり得ない。また、もし、寿鶴齋が恐山を訪れずに、旅の途中で他の旅人から聞いた話を書き記したとすると、「火」の記述の信憑性はおおいに疑ってみる必要がある。

§4. 「猛火焰々として燃えあがり」は噴火記録か？

では、本題の「一陽の火おこり、猛火焰々として燃えあがり、」はどのような火山活動なのだろうか？ まずはじめに、同じ『東国旅行談』にある磐梯山についての記事を見てみたい。この記事は恐山と類似している上に、挿絵があり、より情報量が多いので、比較検討のため有用である。

磐梯山の記事は「(猪苗代湖の)東に大山あり、磐大山となづく。嶮々たる高峯の嶺より炎火たちのぼる事は、烈々としてその煙雲とひとしく、天を焦がす勢ひなり」(『日本名所風俗図会 1 奥州・北陸の巻』

より引用)となっている。「炎火たちのぼる」、「煙」が「雲とひとしく」とある表現は、恐山の「猛火焰々として燃えあがり」、「煙雲を払ふありさま」との記述とよく似ている。

「磐大山之炎」と題されるこの記事に付随した挿絵には、手前に猪苗代湖、遠景に磐梯山が描かれている。この絵では、磐梯山の山頂部のいたる所から「火」が立ち上っている様子が描かれており、特定の火口から噴煙が立ち上っているようには見えない。広い範囲から「火」が立ち上っているように見える可能性としては、ハワイ式の割れ目噴火による火のカーテンか、山火事の二つが考えられる。磐梯山は安山岩質の成層火山であり、ハワイ式の割れ目噴火が起こる可能性はない。もし、この絵のように「火」が見えたとしたら、山火事の可能性が高い。山火事が噴火と誤認された可能性を指摘した例としては、早川(1999)の例がある。早川(1999)は、『吾妻鏡』にある西暦 1251 年の「赤木嶽焼」の記述が噴火ではなく、山火事を記録したものである可能性が強いと考えた。

ここでもう一つの可能性も考えてみたい。実際には煙のようなものしか見えずに、そこからの連想で「火」という表現が生まれた可能性である。「煙」と「火」の間には強い連想関係があるので、伝聞の過程での情報変質、個人の中での記憶の変容あるいは文学的誇張によって、「火」という表現が生まれた可能性も否定できない。そのように考え、挿絵「磐大山之炎」の「火」が、実際は「煙」だったと解釈すると、「火」は水蒸気噴火あるいは広い範囲からの噴気とも解釈できる。磐梯山では、おもなマグマ性の活動は、約 2 万年前には停止して、その後は水蒸気爆発の活動へと移行した(山元・須藤, 1996; 千葉・木村, 2001)。したがって、この解釈の方も十分あり得る。

以上、ここまでの考察をまとめると、磐梯山の「火」の表現の元になった現象としては、1) 噴火とは全く関係ない山火事、あるいは 2) 水蒸気噴火あるいは広範囲からの噴気、の二つの可能性が考えられる。

恐山の部分を見てみよう。ここでも「火」に関する表現は類似し、やはり可能性としては、1) 山火事、あるいは 2) 水蒸気噴火あるいは広範囲からの噴気が考えられる。「時として一陽の火おこり」、「また時いたれば消えて常のごとし」と間欠的な活動を示唆する表現があるので、恐山の記録は山火事ではあり得ない。恐山も、最近 8 万年間は、少数の水蒸気テフラが噴出しただけで、マグマが直接関与した活動はない事が地質調査から明らかになっている(岡島ほか, 2008)。したがって、恐山の「一陽の火おこり、猛火焰々として燃えあがり、」の記述は噴気あるいは水蒸気噴火を表している可能性が高い。また、恐山で水蒸気噴火の可能性が考えられるのは、恐山霊場に近い、宇曽利山湖周辺部のみである。したがって、恐山霊場に関する記述がこの後に詳しく続く事から考えて、

水蒸気噴火があったとしても大規模なものではあり得ない。「一陽の火おこり, 猛火焰々として燃えあがり」に対応するもっとも可能性の高い現象は間欠的な噴気と考えられる。「火」という表現は磐梯山の場合と同様, 伝聞の過程での情報変質, 記憶の変質あるいは文学的誇張によって生まれてきたと考えるのが妥当だろう。

§5. まとめ

1) 天明九年(1789年)正月に刊行された『東国旅行談』巻乃五にある, 恐山山頂で「一陽の火おこり, 猛火焰々として燃えあがり」という噴火を疑わせる記事について検討を行った。

2) この記事は, 小規模な水蒸気噴火あるいは噴気のいずれかを示す可能性が高い。最も可能性が高いのは間欠的な噴気である。

謝辞

本論文を執筆するにあたり, 査読者の群馬大学教育学部早川由紀夫教授の査読コメントは, 本稿を改善する上で, たいへん役に立った。氏の適切なコメントに深く感謝したい。

文献

- 朝倉治彦(編), 1987, 日本名所風俗図会 1 奥州・北陸の巻, 480 pp.
- 岡島靖司・志村聡・荒川武久・水上啓司・宮脇理一郎・百瀬 貢・小林 淳(2008) 恐山火山カルデラ形成後の噴火活動史. 日本第四紀学会講演要旨集, 38, 14-15.
- 千葉 茂樹・木村 純一, 2001, 磐梯火山の地質と火山活動史, 岩石鉱物科学, 30, 126-156.
- 早川由紀夫, 1999, 赤城山は活火山か?, 地球惑星科学関連学会合同大会予稿集(CD-ROM), As-012.
- 村山磐, 1978, 日本の火山(I), 大明堂, 315 pp.
- 山元孝弘・須藤茂, 1996, テフラ層序から見た磐梯火山の噴火活動史、地質調査所月報, 47, 335-359.